

書評

●竹村 洋典(三重大学附属病院・総合診療部准教授)

《総合診療ブックス》

今日からできる思春期診療



編：原 朋邦，横田 俊一郎，
関口 進一郎

●A5 頁192 2007年
定価 3,990 円(本体 3,800 円+税5%)
[ISBN 978-4-260-00343-8]医学書院刊

小児の医療は成人の医療の小型版ではないこと、また高齢者の医療は成人の医療と異なっていることは、日本においてもかなり認識されている。では思春期の患者のケアはいかかなものか。小児科医からは大人、内科医を含む成人対象の医師からは小児とみなされていることも少なからずあるようではないか。特に、思春期の少年少女の疾病が、身体的のみならず、精神的な影響や家族や学校などの社会的な影響があったり、生育歴が大きくかわったりして、診断や治療に苦慮する場合、この年代の患者のケアを苦手とする臨床医は少なくないかもしれない。また思春期の少年少女の扱いが困難で、それゆえに患者-医師関係が形成しにくい場合などは、さらに苦手意識が強くなる。このような苦手意識のある臨床医にとって、この本は、まさしく必読の書といえる。この本を読めば、きっと思春期の患者のケアがおもしろく感じられるであろう。

最初の総論部分では、思春期患者の診察の特徴や方法をわかりやすく説明している。特に日本ではあまり触れられない家族志向のケアにも言及していることはすばらしい。総論ではあるが、理屈ばかりの難解さはなく、さすが臨床にどっぷりとつかっている著者らならではの内容である。内容

がずっと身体に入り込んでくる。

次の各論の【思春期に気になる症状・所見】セクションでは、思春期の少年少女が罹りやすい病気を厳選して、その一症例一症例を大切に詳しく説明がなされている。地域の第一線の医師であればきっと遭遇し、そのケアに困ったことがあるであろう症例ばかりであることが嬉しい。「問診のポイント」、「診察のポイント」、「アセスメント」、さらに「マネジメント」に分けたメリハリのある記述は読者を飽きさせない。そこには、日頃、思春期外来を行っている臨床医だからこそ言及できる診療のコツがそここに記されていて、ワクワクする。「Note」や「メールアドレス」の内容はそのコツが凝縮されている。各項の最後にまとめられた「Caseの教訓」は、具体的に話すべき会話例や、言い得て妙な表現でドンピシャな内容となっていて、「気になる症状・所見」を整理して記憶にとどめるのに非常に効果的である。随所に図表を多く使用して、かゆいところに手が届くような説明は心地よい。ところどころに書かれている「Clinical Pearls」は、読みものとして最高である。思春期診療に必要なエッセンスをこれだけコンパクトにまとめられたことは、奇跡に近い。

本書は、その対象を小児科医のみ、内科医のみとせずに、広くどの専門診療科の医師にも読みやすくまとめている。家庭医・総合医である私も、本書を読みながら、外来で診てきた多くの思春期の患者が脳裏に現れ、納得、反省、驚き、たくさん感情が髣髴してきた。あっという間に本書を読破してしまった。この本は、思春期の患者に接するすべての医師に一度は読んでいただきたい、まちがいないくお薦めの本である。